

第四章 古墳時代

第一節 古墳時代概説

一 古墳時代の始まり

弥生時代を通じて各地で成長を続けてきた地域集団は、政治・軍事面での意思決定機関を整え、クニを形成していった。これらの集団の内部では、生産や軍事・祭祀などさまざまな分野で指導的役割を果たす特定集団がしだいに頭角を現してきた。特に後期後半になると、これらの集団と一般構成員との間の格差が広がり、西日本各地で地域色の強い墳丘墓や周溝墓などと呼ばれる特定集団または個人のための墓地が築造されるようになる。

墳丘墓から古墳へ

これらの墳丘墓や周溝墓はいくら規模が大きく、豊富な副葬品を持っていたとしても、あくまでも弥生時代の墓地であり古墳ではない。では古墳とは何か。この問題は古くから議論されてきた。近年、近藤義郎氏によって一つの見解が示されている。つまり、「古墳とは前方後円

墳を代表かつ典型とし、その成立及び変遷の過程で、それとの関係において出現した墳墓をすべて包括する概念である」と規定している。更に、成立期の前方後円墳の条件であり、かつ弥生時代の墳墓との相違点として、次の四点をあげている。

(1) 墳丘が前方後円形という型式が定まっていること。

(2) 内部主体は長大な割竹形木棺であり、ほとんどそれがコウヤマキで作られている。そして、それを囲う堅穴式石槨がある。

(3) 中国鏡特に三角縁神獸鏡の多量副葬の指向性がある。副葬品はほかに武器若干、生産用具若干が加わる。ただし、玉は副葬されない場合がある。

(4) 埴輪を含め、土器類が象徴的な性格を持っている。つまり、焼く前に底に孔を開けられた壺や壺形埴輪がその典型である。

そして、古墳によつては以上のような要素は、形の若干の相違や、大きさ・数量に多寡^{たか}はあるとしても、四つの特徴を統一して備えているものが成立期の前方後円墳であるとしている。

このような前方後円墳の出現時期は、地域によつてわずかに前後するが、三世紀末から四世紀初めにかけてである。そしてその出現の理由について、同氏は「大和勢力を中心とした西日本各地諸部族の連合が成立したこと、もう一つはその部族連合の成立を契機として、共通の墳墓型式が生み出されたであろう」と考え、各地の首長は「この連合への参加の証」として前方後円墳を築造したとしている。

それでは、このような前方後円墳体制を柱とした大和政権は、どのような経過で誕生したのであるだろうか。

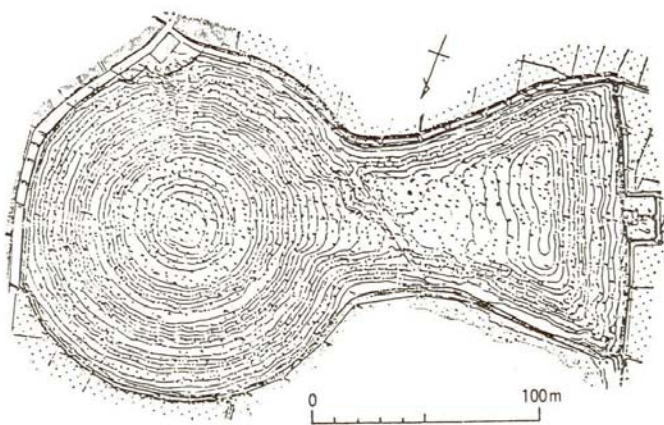
第4章 古墳時代

大和政権の誕生

弥生時代後期後半の三世紀に、畿内では奈良桜井市に纏向遺跡が営まれる。この遺

跡は、一キロ以上の範囲に達する巨大な集落であり、その内
部には矢板で補強した運河や、整然と配置された掘立柱建物跡
があり、瀬戸内西部から南関東に及ぶ地域から搬入された土器
が大量に発見されている。このようなことから、この遺跡は
「初期大和政権の最初の都宮」であると説も出されている。

ただし、大和政権は先の近藤氏の見解にみられるとおり、各地
の首長が大和を中心とした連合に参加することによって初めて
誕生したものである。このため、大和政権の誕生をもって古墳
時代の始まりを考えるならば、畿内の初期の前方後円墳につい
て一考する必要がある。纏向遺跡内で、先の四つの特徴を併せ
持つ最古の前方後円墳は、箸墓古墳（第1図参照）である。この
古墳は三世紀末に築造されており、墳丘の規模はこの時期の古
墳では最大の全長二七六メートルを計る。この古墳の被葬者または築造者が、畿内を代表する豪族の一つであつ
たことは確実であり、この古墳の築造時期に、畿内の豪族と西日本の幾つかの豪族の間で連合が成立したも
のと考えられる。つまり、三世紀末の段階で連合政権の色彩が強い大和政権が、畿内に誕生したのである。



第1図 奈良県箸墓古墳測量図

しかし、箸墓古墳に先行する最古型式の前方後円墳は、今後新たに発見される可能性もあり、成立時期については若干さかのぼることも予想される。

古墳時代の時期区分 なお、前方後円墳に代表される古墳は、全国的に三世紀末から六世紀まで築造され、七世紀代でも前方後円墳は激減するものの、群集墳は盛んに造られる。近年古墳時代を七世紀まで

としてとらえ、三世紀末から四世紀を前期、五世紀を中期、六世紀を後期、七世紀を終末期とする時期区分が一般的になりつつある。

古墳の種類と構造

古墳を幾つかの要素に分けるとすると、外表施設を含めた墳丘と内部主体・副葬品などに分けることができる。古墳時代は四〇〇年前後続いた時代であり、これらの各要素も時期や地域によつて各種のものがみられる。墳丘についてみると、頂点に立つのは前方後円墳で、次は前方後方墳が続き、数の多い円墳・方墳はその下にくる。また、まれに双方中円墳や上円下方墳・多角形墳などもある。大きさは、日本最大の前方後円墳の大阪府大仙陵（仁徳天皇陵古墳）は墳丘全長四八〇メートル・高さ三五メートルを計るが、終末期の群集墳では一〇メートル以下の円墳が数多くある。墳丘の表面は葺石で覆われ、埴輪や石造品・木製品などが立てられている古墳もある。

次に内部主体は、基本的に棺と室（ツボ椰の場合もある）とからなるが、棺だけの場合もある。棺には木棺・石棺・陶棺などがある。前期古墳の割竹形木棺は西日本各地の主要古墳に使用されている。石棺には割竹形石棺・舟形石棺・長持形石棺・家形石棺などがある。陶棺は土師質や須恵質の土器で作った棺で、中国地方西部から畿内で多く使用されている。これらの棺を安置するための室（ツボ椰）は、前期から中期前半まで竪穴式

石室または粘土槨が一般的である。中期後半になると竪穴状の石室の小口側から遺体を搬入するような竪穴系横口式石室が現れる。後期では石室はほとんど横穴式石室になり、複数の遺体を埋葬することが可能になる。

卑弥呼の鏡

中国の歴史書『魏志倭人伝』によると、二二九九年に邪馬台国の女王卑弥呼は魏に使いを送り、枚を授かっている。この鏡は、緑の断面が三角形で、裏面に神と獣の図柄を持ち、景初三年（二三九）の年号を持つ三角縁神獸鏡とする説がある（第2図参照）。

三角縁神獸鏡は、西日本各地の主要な前期古墳から三〇〇枚以上出土しているが、中国での出土例はない。また、同じ鑄型で製作したと考えられる、同範鏡が数面ずつ存在し、かつ同範鏡が各地の古墳に分有して副葬されている。このことから、三角縁神獸鏡は服属または連合した各地の豪族に対して、大和政権が配布した鏡であるとする説が有力視されてきた。ただし、近年前方後円墳ではなく、福岡市藤崎遺跡の6号方形周溝墓からも出土したものと、またこの鏡が古墳への副葬の際にはかの鏡に比べ特別な取り扱いを受けていないことなどが指摘されている。このため、三角



第2図 三角縁神獸鏡

縁神獸鏡は所有者にとって格段に重要な鏡ではなく、また「卑弥呼の鏡」であるとする説自体に対して、懐疑的な意見も軽視できない状況である。

二 古墳時代の変遷

前期

三世紀末から四世紀にかけての前期は、古墳時代が始まり、急速に全国各地に前方後円墳を頂点とする古墳文化が広がる時期である。

弥生時代終末の首長墓をみると、西日本各地は地方ごとに独自の形態の墓を作りだしていた。中国地方東南部の吉備では方形ないし円形に土盛りした墳丘墓が築造され、岡山県楯築^{たてつき}弥生墳丘墓では円丘の両側に突出部を持ち、全長約八〇^{ドル}に達すると推定されている。一方中国山地から日本海側の出雲を中心とした地方では、方形の墳丘の四隅に突出部をつけ、墳丘全体に張り石をする四隅突出型弥生墳丘墓が築造される。

また、北部九州では方形周溝墓や墳丘墓が造られる。このように古墳時代の前段階には、かなり広い範囲を単位として、地域的な結束ができていた。そして、これらの各地方の独自性を取り入れつつ、前方後円墳という共通の祭祀形態を作りだしたのが畿内の有力首長たちであった。畿内政権として誕生した支配体制は、畿内の各平野や盆地を統合した有力首長のなかで、特に強力な支配力を持つ首長（大王）のもとに形成された体制であったと考えられる。そしてこの前方後円墳による祭祀は、最終的には岩手県南部から鹿児島県まで広がっていく。